

生國魂神社に文学と芸能のプロムナードを

辻本 伊織

【目的】

大阪には文学者・芸能人の像（写真・画像・銅像など）が少ないのではなからうか？大阪のまち歩きをここ何年か続けている間に生じた疑問である。人物ゆかりの碑は結構あるのだが、単に碑だけがあっても、その人物のイメージが広がらない。その人間を彷彿とさせる具体的な手段—それはリアルな像をおいてない。そして像という記号を物語に変化させていくことが重要である。物語によって大阪の町の時間層・空間層を豊かなものにしていくにはどうすればいいか？それを探究する過程から生まれた観光資源化プラン—生國魂神社に文学と芸能のプロムナードを造立することを提言する。

【内容・結果】

1、プロムナードの設置場所をどこにするか？

上町台地の中心部に位置する生國魂神社。大阪でも一二と言われる古社である。この神社境内の北側に現在、井原西鶴像と織田作之助像が設置されている。井原西鶴は生誕350年記念、織田作之助は生誕100年を記念しての顕彰・造立であるが、今のところこの二つの像はそれぞれ無関係であり、今後どういう方向に向かうのかは定かではない。しかし、せつかく大阪を代表する文学者ふたりがこうして顕彰されているのである。それをここで止めるのはいかにも惜しいものがある。できるならば、テーマをはっきりさせて大阪を一覧できる文学者群および芸能者群をここに結集させてはどうだろうか。10以上のブロンズ像（あるいは石像）を配置してプロムナードを造る。そこを歩けば大阪の文学と芸能がストリームで自然と理解できるような仕組みができあがる。

2、顕彰する具体的な方法とは？

比較的予算を調達しやすいシステムで大阪の新名所と新イベントを実行させることを眼目としている。像を制作・造立するために年1回の彫刻コンペティションを開催する。石膏像・塑像の応募作から1点選びブロンズ制作する。像を永遠に顕彰するとともに、その協力者（パートナー、スポンサー）の名前も作者名とともに像台座の然るべき箇所記銘される。今後10年間のイベント実行をも視野に入れておく必要がある。

3、誰を顕彰するか？

そのような場所に誰をもってくるか。私見では、3人目は上町台地出身の直木三十五を持ってきたい。直木賞の名ばかりがいたずらに高く、その由来となったご本人出身地の大阪でさえほとんど知られていない。作品はともかく顔さえ知らない人が多いのではなからうか。彼こそまず、像として顕彰し、物語を紡ぎ出してもらうにふさわしい文学者（文豪）だと考える。

1. プロムナードの設置場所をどこにするか？

大阪の中心部が望ましい。

当然人々によく知られた立ち寄り先であれば申し分ない。

プロムナードを設置する十分なスペースが必要である。

生國魂神社正門

大阪府大阪市天王寺区生玉町 13-9



そこでいくつかの候補地から選び出したのが上町台地の中心部にある大阪の古社で生島大神・足島大神を御祭神とする生國魂神社である。神社としての知名度・社格は高い。

神社の北側の部分は日本庭園化され散策道もある。さらにありがたいことに井原西鶴と織田作之助の銅像がすでに設置されている。巡回路もあり、スペースも十分である。ここを充実させれば、現在ある像も有機的に意味を深め相乗効果が望める。生國魂神社の魅力を高め、他のどこにもないユニークな文学と芸能のプロムナードができる。

生國魂神社境内図



左図のプロムナード化部分を拡大する



Aに井原西鶴像 Bに織田作之助像

後は松尾芭蕉・生田花朝など句碑がいくつかあるだけ、余裕をみて20人くらいなら銅像設置可能ではなかろうか。

2. 顕彰する具体的な方法とは？

- ①比較的安価な予算で実行可能なこと
- ②イベント性・話題性があること
- ③創作者・パートナーに訴求しやすいこと

この3点を考慮してなおかつ永続性があり、顕彰される人物も、顕彰される場所も、この実行イベントも大阪の発展・活性化に寄与することを目的とするものである。

彫刻コンペティション ポスター例

**文学と芸能のプロムナード
彫刻コンペティション**

**賞金
100万円**

大阪の文学者・芸能人のイメージと業績
を未来永劫たたえましょう。

応募資格 プロ・アマチュア 年齢不問

締切り 00年 0月0日まで

主催 生國魂神社
彫刻選考委員会

さあボクに続いて
プロムナードに集まろう

コンペティションに関して

- ・実行委員会を設置し顕彰する人物を選ぶ。
私案では直木三十五
- ・プロ・アマを問わず応募者に広く呼びかける。
- ・一般にもこういうイベントがあり、同時に新名所たる『文学と芸能のプロムナード』ができることを知らしめる。
- ・コンペティションの応募は石膏像・塑像での応募とする。
- ・優秀者に賞金とブロンズ像制作設置し、栄誉を恒久的に顕彰する。
- ・パートナーシップとして資金面での援助に貢献された方も、その栄誉を恒久的に顕彰する。

パートナーシップに関して

- ・賞金100万円、制作費100万円を提供していただく。パートナーをブロンズ像台座に永久記銘する。

直木三十五に続く顕彰対象の文学者・芸能人としては、例えば近松門左衛門を想定している。大近松に対しての扱いは現在の谷町にある墓石の状況を鑑みていかなものかと思われる。

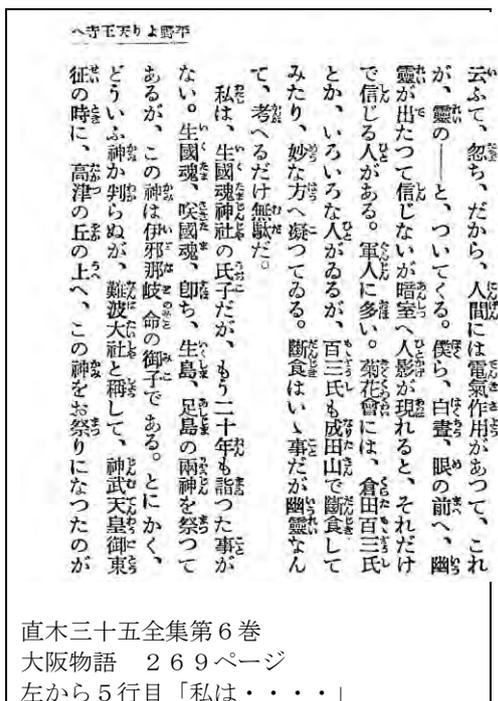
生國魂神社では境内に浄瑠璃神社があり、近松はじめ文楽関係者が祭祀されている。もちろん竹本義太夫も像がない状態であるから、実現が望ましい。

このふたりに関しては、他府県の顕彰が先行する可能性は大と言える。

3. 誰を顕彰するか？

候補者は数多い。大阪に文学碑はあっても文学者の銅像はほとんどない。芸能関係者もまた然りである。それでも生國魂神社に井原西鶴と織田作之助がすでに顕彰されているありがたい事実がある。直木三十五は生前はその名を知らない人はなかったほどの文名をうたわれた全国的なビッグネームである。しかし、現在は直木賞ばかりが知られ、顔も代表作も知られていない情けない状況になっている。文学碑はあるが、それでは彼の面影は彷彿しないのである。彼こそ顕彰すべき文学者と考える。

直木三十五は生國魂神社の氏子なり



生國魂神社との関係があればありがたいので、いろいろと資料を物色したが、なかなか判明しない。それでも作品に藤原家隆の塚の辺りの記述などがあるから、とにかく全集（21巻）をかたっぱしから読みこむことに努めた。『大阪物語』は既読であったので後回しになったが、このフレーズをその時は重要性を持っていなかったの見落としていた。

生家が谷町6丁目付近であるし、居宅が安堂寺町なので、間にいくつも神社がある。まさか生國魂神社の氏子とは思わなかった。これほどはっきり宣言があるなら、生國魂神社の門前に住んでいたという織田作之助に関係性においてはエビデンスでひけはとらないように思われる。

直木三十五執筆スタイル



直木三十五全集別巻（示人社発行）
グラビアより

『芸術は短く 貧乏は長し』が彼の文学記念碑（横浜市金沢区 富岡）に刻まれたキャッチコピーである。彼は終生、借金に追われており、机、椅子など持っていればすぐに差し押さえられるので、大概はこのスタイルで執筆した。こうした長年の胸部圧迫が死病となる胸部疾患の誘因となったのかもしれない。

銅像造るなら絶対にこのポーズの直木三十五を実現したい！寝像は涅槃像以外あまりないだろうし、奇を衒っても直木なら面白いと思う。ただし、足部分は補充創作していただかねばならない。